

立命館大学

国際平和ミュージアムだより

KYOTO MUSEUM for WORLD PEACE

● CONTENTS ●

スポット

2

ミュージアムの収蔵品61

『宝塚少女歌劇四月月組公演』(パンフレット)

巻頭
つれづれ

3

「非力」でも「無力」ではないという確信

立命館大学国際平和ミュージアム名誉館長
安斎 育郎〔立命館大学名誉教授〕

館長だより

5

「積極的平和の原点」を辿れば

平和と民主主義において感性に訴える展示と理性に基づく平和研究の融合の意義
立命館大学国際平和ミュージアム館長
モンテ・カセム〔立命館大学政策科学部教授〕

ここが
見どころ

7

「生きた記憶」の連続性

立命館大学国際平和ミュージアム副館長
加國 尚志〔立命館大学文学部教授〕

運営委員
リレー連載

8

改めて見つめられた平和教育への思い

立命館大学国際平和ミュージアム メディア・資料セクター長
赤沢 真世〔立命館大学スポーツ健康科学部准教授〕

ミュージアム
おすめの
一冊

10

広瀬直子 著

『1分間英語で京都を案内する』(KADOKAWA・中経の文庫 2014年3月刊)

立命館大学国際平和ミュージアム運営委員
臼井 豊〔立命館大学法学部教授〕

ミニ企画展

11

開催報告 (2014年10月～2015年1月)

事業報告

12

- 特別展 世界報道写真展2014
- 2014年度 秋季特別展 ピース☆スタイル
- 「わだつみ像」と不戦のつどいのこと
- 文字・活字文化の日「平和って なに色?」
- チャレンジ体験受け入れ
- NGOワークショップ (2014年度 第2回)
- 第21回日本平和博物館会議に参加して

19

- 立命館附属校平和教育実践展示に関わって
- 世界の平和博物館の紹介 アメリカの平和博物館 刀を鋤にギャラリー・平和センター
立命館大学国際平和ミュージアム副館長 山根 和代〔立命館大学国際関係学部准教授〕
- ボランティアガイド活動日誌
立命館大学国際平和ミュージアム ボランティアガイド 高城 義秋
- 2014年度入館者状況 (2014年4月～2015年1月)、編集後記
- ミュージアムインフォメーション



日本平和博物館会議
ASSOCIATION OF JAPANESE MUSEUMS FOR PEACE



立命館大学
国際平和ミュージアム

Kyoto Museum for World Peace,
Ritsumeikan University

『宝塚少女歌劇四月月組公演』 (パンフレット)



①1940 (昭和15) 年 4月 15.5cm x 15.5cm
②参考:『宝塚歌劇二月雪組公演』(1942年)

1913 (大正2) 年、(当時の) 阪急電鉄の経営者小林一三は、沿線の新興中産階級に向けたモダンなエンターテインメント事業として宝塚唱歌隊(後に宝塚少女歌劇団、現在の宝塚歌劇団)を設立し、学校組織を母体とした運営や西洋式の音楽教育で日本独自の歌劇文化を築きました。そしてヨーロッパからのレビューの導入や、髪を短くした男役が多く、女性たちを熱狂させました。このプログラムも、当時ファンであった少女のものです。1938年から43年の間のプログラム39冊が寄贈されていますが、1941 (昭和16) 年分は15冊あり、足繁く観劇に訪れていたことが伺われます。

1940 (昭和15) 年4月の『宝塚少女歌劇四月月組公演』では花の髪留めに花柄のチャイナドレス、頬紅をつけて上目遣いに微笑む少女を描いたピンクの表紙(画像①)や、クローバーと蝶をあしらった紙面の飾り枠(画像③)が少女らしさや可愛らしさを追求し、少女たちの夢の世界を表現しています。中は演目と各場面の配役と出演者、そして広告で構成されています。演目は、上演に先立つニュース映画上映、オペレッタ『白鳥の死』、ドラマチックバレエ『清姫』、日満支親善・グランドレビュー『春のをどり』でした。『春のをどり』には「興亜の春」や「満洲の春」等の場面があり、表紙はこれをイメージしたものでしょう。国民精神総動員運動や挙国一致のスローガンも見えます。しかし、「御注意」には「其の筋の御達しにより歌劇学校生徒出入りの節多数の方が御待合せになって居るのは時局柄面白くないと存じますので、御遠慮下さる様お願い致します。」とあり、国民精神総動員が実施されようと、ファンは出待ちをし、宝塚の世界に心酔し、劇団側もファンの求める夢の世界を提供していたことが伺われます。

しかし、文化の統制が更に強化されると、海軍省や大政翼賛会などの作品が増え、レビューやバレエ等のジャンルが消えて舞踊や歌劇などの日本的なものが大半を占めるようになります。そこには戦後の宝塚での舞踊の上

演や、戦中も戦後も変わらない軍服姿の人気など、一貫したつながりも感じられますが、残されているパンフレットの印象は全く異なります。

『宝塚歌劇二月雪組公演』(1942 (昭和17) 年) では、最初に「戦い抜いて勝ち抜いて」の歌、その後大政翼賛会宣伝部構成の翼賛譜「この感激を」、舞踊「女夫獅子」、東亜共栄圏シリーズ第二作歌劇「北京」が上演されています。表紙から可愛らしさのアピールは消え、飛行機や大政翼賛会のマークが描かれ、「屠れ! 米英我等の敵だ!」「進め! 一億火の玉だ!」といった標語も印刷されています。そして1944 (昭和19) 年には、決戦体制の下で劇場が閉鎖されました。

また、広告もこの時期、同様に表現を変えました。例えば、『宝塚少女歌劇四月月組公演』(1940年) の見返し(画像③)頭痛薬「ノーシン」の全面広告には、和装に日本髪的女性二人のイラストが描かれ、「御婦人の暗い顔は禁物!」と、女性の魅力を支えるために頭痛薬が一役買うことをアピールしていますが、『宝塚少女歌劇二月雪組公演』(1942年) の見返し(画像④)には鉢巻をした女性と男性のイラストに「元気に働きませう」となり、銃後の女性労働を前提に頭痛薬もその支えとなることを訴える内容に変化しています。1943年には、電話交換手として働く女性1人のイラストに「頭痛や頭の疲れはノーシンに任せて さあ! 二年目も清澄明快で大活躍」と、その訴えが強調されるとともに、すでに銃後に男性のいない状況を反映します。たった2年で宝塚を楽しむゆとりある人々にも大きな変化を与えたことがわかります。



③『宝塚少女歌劇四月月組公演』(1940年) の見返し



④『宝塚少女歌劇二月雪組公演』(1942年) の見返し

「非力」でも「無力」ではないという確信

立命館大学国際平和ミュージアム

名誉館長 安 斎 育 郎

(立命館大学名誉教授)

■ 阪神・淡路大震災から20年

1995年1月17日、マグニチュード7.3の兵庫県南部地震が発生し、京阪神地方に激甚な被害を与えました。その阪神・淡路大震災から、20年が経ちました。

あの日、テレビ画面を通じてみた神戸の惨状は、想像を超えた自然の破壊力を突きつける衝撃的な現実でした。原子力工学を専門として生きてきたこともあって、すぐに、「愛媛県の伊方原発は大丈夫か？」という不安がよぎりましたが、一方では、「震源近くに原発がなくてよかった！」とも思いました。

私は、京都の久美浜原発、和歌山の日置川原発、高知の窪川原発、愛媛の伊方原発、山口の豊北原発などの住民運動と関わってきましたが、反対運動のために伊方原発以外は建設されなかったことに、いくらホッとした感情さえ覚えました。

しかし、自然は原発のない場所を選んで地震を起こすわけではありません。大震災のその日から、私の心の中では、巨大地震に起因する原発災害への懸念が現実感をもった心配のタネになりました。40年この方原発政策批判に取り組んできた理由の一つは、この地震列島に巨大な危険性を内蔵した原発の集中立地など進めるべきではないという強い思いでしたが、現実には、北米プレート、ユーラシア・プレート、太平洋プレート、フィリピン海プレートという4つの岩盤がせめぎ合っているこの日本列島には、北海道から九州まで50基をこえる原発が建設されてしまいました。あとは、「まさかの重大事故」が起これないことを祈るばかりー阪神・淡路大震災を機に、ますますそう思った思いが募りました。

その16年後の2011年3月11日、懸念は現実となってしまいました。兵庫県南部地震の350倍の破壊エネルギーをもつマグニチュード9.0の東北地方太平洋沖地震が発生し、巨大津波が東北地方に襲いかかりました。この東日本大震災の中で、ついに福島原発が未曾有の大災害を起こしてしまいました。私は、4年経った今も毎月の福島通いに取り組み、放射能調査をもとに「リスクの最小化」に努めてはいるものの、私の心は晴れようもなく、自らの非力を責め続けています。でも、「非力」ではあっても「無力」ではないと、一方では、そう確信しています。

■ 原爆投下から70年目に考える

2015年は広島・長崎への原爆投下から70年目に当たります。原爆で地獄を体験した被爆者たちの声をかぎりの訴えが、幸い、その後の核兵器実戦使用に歯止めをかけてきました。しかし、70年前に1つだった核保有国は9つに増え、人類はいまだに「核の脅威」から解放されていません。「核地獄」に正面から向き合おうとしない人々が、「核抑止論」という怪しげな理由づけをして、地獄に通じる道をせっせと造成し、突き進んできました。

今から30年ちょっと前、この国が反核市民運動の昂揚期を迎えていた中で、私は珍しい取り合わせの鼎談に臨んだことがあります。考古学者の江上波夫さん、天文学者の古在由秀さんとの核問題についての鼎談です。江上さんは、「日本の古代国家の起源は、東アジアの騎馬民族にある」という説で知られる東大名誉教授。会長を務めておられた日本考古学会が核兵器廃絶の声明を出したことで、この鼎談のご縁が生まれました。一方、古在さんは東大教授で、著名な哲学者である古在由重さんは父方の叔父、第44代内閣総理大臣の幣原喜重郎は母方の大叔父、もっと遡ると三菱財閥の創始者である岩崎弥太郎にもたどり着くという方でした。私は東大医学部助手で、原水爆禁止運動に科学者の立場でそれなりに深く関わっていました。

鼎談の中で私が、「第二次世界大戦前夜にウランの原子核分裂反応が発見されたのは不幸な時代の巡りあわせだ」と発言すると、江上さんが、「安斎さん、古来人間はその時代の最先端の科学技術を殺戮のために使ってきた歴史があります。その視点から見ると、石器時代は人を殺すといっても限られていたが、金属器時代になるとそれなりに多くの人を殺せるようになり、火薬の発明によって不特定多数の人間を殺戮できるようになったが、それに伴ってそれぞれの殺傷技術が支配する時代がだんだん短くなってきた。そしてついに、人類は20世紀に核エネルギーを殺戮の手段として利用するに至った。もしかすると、核兵器が支配する時代は100年単位の短いものになり、人類の破滅に結びつきかねない。そのような人類史的認識をふまえてこそ、日本考古学会は核兵器廃絶の見解を発したのだ」と言われました。私は感動しました。現在では、

宇宙衛星技術を駆使した全地球的監視・諜報システムと、電子技術を利用した無人攻撃システムの構築によって、殺戮の体系はますます「高度化」「非人間化」しています。



福島調査結果をラジオで紹介する安斎

100年前に現れた戦争手段のこと

今から100年前、第一次世界大戦中に、戦争技術の画期が訪れました。前年の1914年に勃発した大戦の舞台であるヨーロッパでは、戦場に長大な塹壕を掘り、兵士たちが身を潜めて互いに射撃や砲撃を繰り返す「塹壕戦」が繰り広げられていましたが、開戦1年後の1915年、陸海空のそれぞれの戦場にそれまでとは異なる戦争手段が登場しました。

1月には、ドイツ軍がツェッペリン飛行船でイギリスのロンドンへの空爆を始めました。飛行船はすでに19世紀の半ばに開発されていましたが、1897年にオーストリアのダーフィット・シュヴァルツが軽金属や木材で骨組みを作って外皮を貼り、その中にいくつかの気嚢を収めるタイプの「硬式飛行船」を開発、フェルディナント・フォン・ツェッペリン伯爵がその特許を買っていました。

2月には、今度はドイツ海軍がイギリスとの交戦海域でUボート（潜水艦）による無制限潜水艦戦を始めました。第一次世界大戦では約300隻が建造され、およそ5300隻の商船を撃沈する戦果をあげたと言われています。

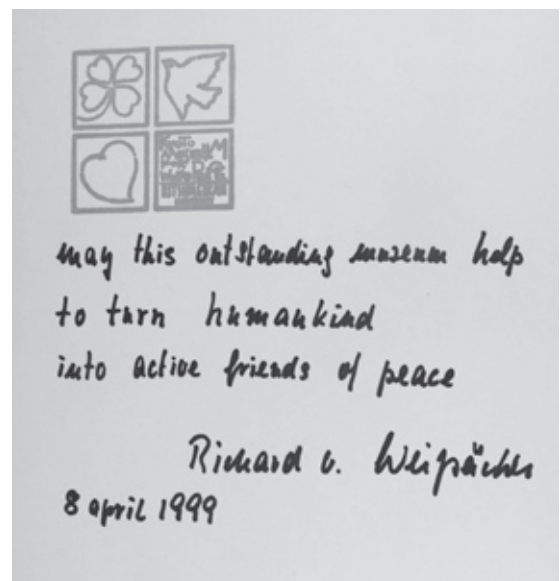
4月には有名なベルギーのイーペルの戦いで、ドイツ軍が毒ガスを使用しました。イーペルはベルギー西部のフランデレン地域のウェスト＝フランデレン州の都市で、第一次大戦中、ドイツ軍と連合軍の戦いの最前線になり、毒ガスの使用によってフランス兵約5000人が犠牲になったとも言われています。

ちょうど100年前に、人類は、空から陸から海からの新たな破壊と殺戮の戦争手段を獲得し、無差別大量殺戮の時代に入っていったのです。そしてその30年後、現代科学の最先端で発見された核エネルギーが、

広島と長崎に「究極の非人道」とも言うべき核地獄を出現させました。

今年はそのような歴史を振り返り、これからの人類共存の道を考える良い機会にしたいものです。人々の意識を変えるのは易しくありませんが、広島・長崎の被爆者が核兵器の実戦使用を防ぎとめてきたように、希望はあるのです。ベルギーのイーペルは「ヨーロッパのヒロシマ」と言われることもあります。現在では、「化学兵器が使われた最初の地・イーペル」と「核兵器が使われた最初の地・ヒロシマ」は緊密な友好関係を結んでいます。ウェスト＝フランデレン州には「イン・フランダース・フィールド博物館」や「イーペル・タワー博物館」などの平和博物館があり、第一次世界大戦の惨禍を今日に伝える努力を重ねています。第4回国際平和博物館会議は、「イーペル・タワー博物館」の主催でオステンド市で開催されましたが、オステンドは第一次大戦ではドイツ軍のUボートの基地があった町です。楽観せず、悲観せず、一步一步戦争の悲惨さや平和の尊さを訴え続ける愚直な努力を、立命館大学国際平和ミュージアムも続けたいと思います。

今年1月31日、統一ドイツ初代大統領のリヒャルト・フォン・ワイツゼッカーさんが亡くなりました。同氏は「過去に目を閉ざす者は現在も見えなくなる」と述べたことで知られています。ミュージアムには大統領が訪れたときに書いてくれた色紙が展示されていますが、今年を「過去を誠実に見すえ、現代と真剣に向き合い、目指すべき未来を模索する新たな節目の年」にしたいものです。



ワイツゼッカー大統領の色紙（当ミュージアム蔵）
「この傑出したミュージアムが、人類を積極的な平和の友に転換させる助けになりますよう」（リヒャルト・フォン・ワイツゼッカー）1999年4月8日

「積極的平和の原点」を辿れば

平和と民主主義において感性に訴える展示と理性に基づく平和研究の融合の意義

立命館大学国際平和ミュージアム

館長 モンテ・カセム

(立命館大学政策科学部教授)

Peace Style

昨年、立命館大学国際平和ミュージアムで“Peace Style”と名付けた特別展が行われた。戦後日本において、平和と民主主義の下で国家形成の歴史的事実と市民の動きを語り、感性に訴える展示を見て感動したことを覚えている。だが、求めていた何かが足りないという印象から抜け切れなかった。素晴らしい展示であるのに、その気持ちの原点に何があったのかを考え辿りついてみるという分析力をより一層加えていけば、社会の動きを構造的に理解でき、戦後の平和の支えになっている側面と戦争の道を歩んだ戦前の経過が見え、二度とその悲惨な歴史を繰り返さないために大事なことだと思った。

ミュージアムの第三ステージプランの課題である2015年設立予定の平和研究センターの意義はここにあるとはっきり見えてきた。平和研究の高度化は今、変換期である日本社会にとって大変重要であり、日本の「積極的平和」の外交路線で何が最も大事かを整理する時期において注目すべき課題とも言える。

“Peace Style”の展示では、戦後日本で市民運動によって守り抜いて育てられてきた平和大国の歩みをビビッドに表現していた。だが近年「アラブの春」でも見られるように市民運動そのものは社会的変容のきっかけであっても、継続的にその原動力を社会の中に根付かせるためには、そのための制度づくりと人の育成は大事だとつくづく考えさせられた。その期待に立命館大学国際平和ミュージアムは、今日の日本社会がさらされている「積極的平和」へ意味ある貢献をするのであれば、その本来の概念の原点に戻らないと研究所の貢献は本物ではないと思われる。

「積極的平和」とは、元来は単なる国家間の紛争や地域紛争がない状態に加え、社会における飢餓・貧困・人権抑圧や差別などがない状態を指している。

「積極的平和」の概念を実現するうえで、戦後日本の国家としての行き方が問われている。憲法9条の改正、自衛隊の海外派遣とその役割、国内外のテロ活動への対応、それに関連し「国益」を優先した秘密保護法の意味合い等を理性的に、日本の市民の間で、また国際社会と共に議論をしなければならない時代である。

このような対話の場として、我がミュージアムや設立予定の平和研究センターを位置付けなければならない。間違いなく今日の平和維持、平和構築等の課題は困難な課題である。最近、中東シリアでイスラム武装

組織ISIS (Islamic State of Iraq Syria) によって殺害された日本人、湯川遥菜さんと後藤健二さんの死を無駄にしないためには、それを武力で抑える条件を持つことだけで解決できると考えることが、無理に近いものと感じる。その観点からも国民国家ではない、国境を越えて広範囲に影響を持ち始めた武装組織 Al Qaeda, Taliban, ISIS等の行動の原点はどこにあるかを探り、その解決に向けた基盤を創っていくことをテロの現象そのものに現実的に対応することと同時に進めなければならない。簡単な事とは思わないが、その責任を平和大国日本はどう果たすつもりかはとても重要な課題である。また、それに昨今、論じられている政府の「積極的平和貢献」はどのようなものであるべきかの政策分析、提案等も新研究所の課題のひとつであると考えている。

2015年1月のスリランカ大統領選挙から得た教訓

別の観点で日本は国際社会の中で平和構築の責務を果たすのであれば、その力量や外交力向上にとって教訓とすべき切っ掛けが最近起きている。親日国と言えるスリランカでは、今年の1月8日に大統領選挙があった（憲法を改正して大統領の任期制限を撤廃し長期政権をめざした現職のラージャパクサ大統領〔民主社会主義政党・スリランカ自由党所属〕が、野党統一候補として立候補したシリセーナ前保健相に僅差で敗れ、政権の座を失うこととなった）。その場面での日本の行動を分析してみる価値があると思う。

まず親日国であるとは言え、日本政府から選挙で選ばれた新政権（シリセーナ・スリランカ新大統領 Maithripala Sirisena, President of the Democratic Socialist Republic of Sri Lanka）への祝意のメッセージが遅れた。米国、EU諸国、韓国、中国等の首脳挨拶よりもっと後に日本の安倍首相のメッセージが報道された。42年間日本に住み着いている私は、選挙後、母国スリランカに赴き、毎朝現地の新聞で日本の心を込めたメッセージを期待していたが、正直に言って日本の出遅れは少し恥ずかしかった。

なぜそうなったのかと考えてみた。一つ思い浮かぶ理由は、日本が既存の体制、すなわち現役の政府を大事にする慣習から生まれたと思う。昨年9月に安倍首相はスリランカを訪問し、与党の政府代表者中心の日程を組み、野党側の政治家と意見を交わす場がなかった。結果として政権交代になった時、日本を味方にす

る意味を理解し、積極的に日本を応援する人が新政権の中になかった。さらに日本からの祝意の言葉も遅れた。海洋貿易路、シーレーンの安全保障上、スリランカが重要な拠点であることを考えると外交上損をしたとを感じる。

もう一つの側面がある。国際連合の人権委員会（UNHRC）は、2009年の武装集団LTTE（タミル・イーラム解放のトラ）によるテロ行為の終結後もスリランカの国内で人権侵害の疑いを捜査すべきと言い続けてきた。これに対して、スリランカ側は過去の教訓と和解を振興するための委員会（Lessons Learned and Rehabilitation Commission, LLRC）を設けて与党・野党の合同審議を続けたが、その提言を実施せず棚上げしていたことも国連人権委員会側の不満の原因であった。ここでも日本政府はスリランカの現政府側の味方をして、もっとスリランカに時間を猶予すべきだと主張し、便宜を図った。これ自体は親日国への応援とも思われるが、この時期に報道関係者の殺害、行方がわからない市民、白いライトバンで来る武装集団の人権侵害等も増え、国民の不安も増大していたことも事実であった。三権分立が崩れ、大統領任期の二期限定の制約排除等によって1921年から育てられてきたスリランカの議会制民主主義の基盤が崩れかけているのではないかという国民の不満も増大していた。テロとの戦いで勝利した新しい大統領が大変な人気者であり、経済も順調に成長し国土インフラもできてくるなかで、この水面下の動きに気付かなかったことも分からないことではない。だが、外交上それを掴めなかったことが、今日の日本とスリランカ間の関係を表している。

昨年5月に野党の党首が米国を訪問し、国連人権委員会の委員長と会い、米国・インド・韓国等の代表者の理解も得た。8月になると、2年前から水面下で準備をしていたといわれている野党側の政治活動が表に見える形で進行する。そのことをスリランカの野党の党首は日本の首相に直接話す場を申し込むが、スリランカ政府の意向を尊重した安倍総理は野党側の意見を聞かずスリランカを立ててしまう。

このような対応を教訓としてあげたが、民主主義の構造が崩れ、平和を失う危機の時に日本の「積極的平和貢献」はどうあるべきかが問われる例ではないかと思う。選挙日に間もない時、人権侵害や軍事クーデターの恐れを感じた連立与党は、各国大使館代表を呼びその心配を説明し協力を求めたようだ。快く反応した国もあったようだが、残念ながら日本はその国々の中に入らなかったと聞いている。それはともかく、日本は真にスリランカの平和と民主主義を守りたかったと思うのだが、国際舞台で速やかな行動をとり、意思表示ができなかったことを残念に思う。その理由を探り、今後の外交の場に教訓として生かせば、「積極的平和構築」に貢献することは国際舞台において明白になる

だろう。

過激派組織の攻撃にさらされたスリランカの国民の心の底にあった願いは、今回の選挙結果によって、テロ集団LTTEを2009年に武力制圧した英雄であったラジャパクサ大統領は1月9日の朝4時半に野党の党首、ウィクラマシンハ氏（前スリランカ大統領）に大統領府のカギを渡すのを見て、平和と民主主義は「ぎりぎりまでセーフだった」と言う印象を受けた。国民の英雄と思われてきた方の政治的力の低下は、民主主義の制度的枠組みの崩れと比例していたとも言える。それを再び立て直すために1月9日に誕生した巨大な連立政権が今後、約束通り平和と民主主義を取り戻せるかは100日後に行う予定の議会選挙戦で決まるだろう。制度的に弱い基盤が確立するまでには時間もかかる。この時こそ日本で話題になっている「積極的平和貢献」が活かせないかと思われる。弱々しい平和基盤であることも事実だが、平和と民主主義が勝利したその根底には選挙権の力が土台になっていたことも間違いない。82.7%のスリランカの国民が1月8日に投票所に行って政権交代の意思表示をしたことを見ると、その国の一国民として誇りに思うことで心が温まる。日本との外交上の歪みを治し、再び強いパートナーシップを創ることは、日本の平和と民主主義にも大きく貢献するものと確信している。

■ おわりに

平和な社会を取り戻したスリランカの市民の動き、国家公務員の中立性、選挙日まであった武力行為のすべてを選挙日に抑えた警察、軍事クーデターの疑いがあった時に、それを堅く守り抜いた軍人たち等の心を何が動かしたかは、私にとっても謎です。このようなケース分析をわが平和ミュージアムの研究対象にしていく中で、積極的平和貢献の原点が見えてくるのではないかと思う。“Peace Style”も市民の手で創った平和構築の語りであった。今回のスリランカで起きた教訓の中で、一番大事だったのは何なのか考えていきたい。



独立記念館 1948年2月4日の独立を記念して建設されたもの。

1月9日、新大統領の就任式が、国民との自由な対話のなかで行われた。

広場には初代首相 Don Stephen Senanayake の像がある。

引用： http://en.wikipedia.org/wiki/File:Independence_Commemoration_Hall.jpg

「生きた記憶」の連続性

立命館大学国際平和ミュージアム

副館長 加 國 尚 志

(立命館大学文学部教授)

戦後70年を迎える2015年、立命館大学国際平和ミュージアムでは日本の戦後を問う展示企画を予定しています。

太平洋戦争が終結して70年を経て、日本人がその70年間に戦争についてどのように語り、どのように戦争の記憶を継承してきたのか、そしてそのことは戦争についての日本人の認識にどのように影響を与えたのか、ということ批判的反省的に検証すべき時期が来ているように思われます。

少し気取った言い方をすれば、「語ることに」「語り」「物語の物語」ということになるでしょうか。国際平和ミュージアムの展示も、こうした観点からすると、満州事変に始まる一五年戦争以降の歴史についての一つの「語り方」「歴史の構成」の枠の中で展示されていると言えます。国際平和ミュージアムが開設されたのは1992年、戦争が終わって47年目の頃ですから、国際平和ミュージアムの展示も、戦後になってからの戦争についての語り方の歴史の一部になっているのです。

展示を見に来てくださる学生や生徒から寄せられる感想に、「戦争の時代のひどさがよくわかった。現在は平和で、私たちは幸せだと思う。だから平和を大切にしなければならぬ。」というものがとても多いのですが、実は、このような感想を生み出すことには、いささか問題があるかもしれません。

日本が戦争をしたのは過去のこと、加害や被害も過去のこと、というフレームが自動的に設置されてしまうとすれば、そこには思わぬ落とし穴があるのではないのでしょうか。

もし日本が戦争の体制を戦後に清算したという見方をもちたすとしたら、それは知らず知らずのうちに、1945年を境にした「戦前」と「戦後」の「時代区分」を自明のものと認めてしまっていることとなります。

「記憶」はいつ「歴史」になり、「歴史」はどのようにして「記憶」と結びつけられるのでしょうか。「歴史」は、さまざまな「記憶」に基づく証言や事実を史料として、大きな「時代」区分を定め、ある物語的な構成に再編成することでそれぞれの「時代」の特色を際立たせていくものです。そして「歴史」は、何らかのしかたで常に、何らかの「共同体」の歴史であり、多くの場合「国民」の概念を中軸に置く歴史であることに

なります。

しかし、「記憶」は、そのようにして構成され、作り上げられた「歴史的記憶」とは別の位相を持っています。フランスの哲学者ポール・リクール(1912-2004)は『記憶・歴史・忘却』という著作の中で、「生きた記憶の連続性」について語っています。「生きた記憶」には、たとえば親から子へ、年長者から若い世代へと語りつがれる「世代横断的な絆」が存在します。祖父や祖母の戦争体験を聞く、という経験は、「国民」という不特定多数の集団を主語とする「誰のもの」とも言えない「学習した歴史」から、「生きた記憶」への移りゆきを可能にします。世代から世代へと語り伝えられることによってできあがっていく「集合的記憶」と、史料から組み立てられた「歴史的記憶」には不調和がある、とリクールは指摘しています。

市民たちが語り伝えていく「記憶」が、どうしても「国民」の歴史の時代区分とその物語にうまくはまり込まないとき、それは排除されたり、隠蔽されたりして、「忘却」に沈められていきがちです。もちろん、「記憶」を保持している経験者もいつかはこの世を去ってしまうわけで、それは文書や音声・映像記録として、歴史史料として保存されていくことになる以上、「歴史」と「記憶」を単に対立的・断絶的にとらえるべきではありません。「歴史」と「記憶」を結び合わせることでできるものがあるとしたら、それは記憶を語り共有していく世代横断的な「市民」の存在と、記憶を受け継いでいくことを私たちに求める「他者」、すなわち多くの場合死んでしまった、あるいは現在も苦しみつづけている被害者たちへの責任という倫理的要請とではないのでしょうか。

リクールは「他の共同体の苦しみに対して目をつむり、耳をかきなくなるほどに、自分自身の苦しみに退き、閉じこもる時」に、ある共同体は特定の共同体の記憶を否認する、と警告しています。市民によって語りつがれる「生きた記憶」が、他者への公平性や公正さを根本とする「正義」の意味に出会うのは、「国民の歴史」が他者に対して閉じたものになってしまうことを批判するはたらきにおいてであると言えるでしょう。国際平和ミュージアムの展示も、このような「生きた記憶」へとつながるものであるべきです。

改めて見つめられた平和教育への思い

立命館大学国際平和ミュージアム
メディア・資料セクター長 赤沢 真世
(立命館大学スポーツ健康科学部准教授)

はじめに

立命館大学スポーツ健康科学部に着任したのは5年前の2010年4月のことでした。そして運営委員としてお世話になることとなったのが、国際平和ミュージアムとの出会いでした。そこから5年間、大変微力ながら、BKCにある学部として、人種や文化を超えたつながりを生み出す「スポーツ」を掲げる学部として、平和ミュージアムとのかかわりを模索してきました。そして今回この連載の場で、これまでの5年間での取り組みを振り返る機会を与えていただきました。小さな取り組みばかりですが、自分なりに意味づけを試みたいと思います。

スポーツ健康科学部における 平和ミュージアムの活用の促進

(1)基礎演習（1回生小集団科目）における 平和ミュージアム見学

運営委員になり、BKCの運営委員の先生方との懇談のなかで、4年間一度も衣笠キャンパスを訪れることのないまま、また国際平和ミュージアムの存在を知らないまま卒業する学生の存在もあとを知りました。そこで、2012年4月より1回生の小集団科目「基礎演習」の担当になったことを契機に、基礎演習の時間を利用して国際平和ミュージアムの見学を位置づけることとしました。立命館大学に入学してまもなくの一回生だからこそ、BKCキャンパスだけでなく衣笠キャンパスにも足を延ばすこと、そして国際平和ミュージアムという「大学立」の施設の存在や設立の背景を知ること、とても重要なことだと感じたからです。

2012年度の担当一年目には、私の担当クラスのほか2クラスの担当教員がスケジュールを合わせ、ミュージアムの見学に同行してくれました。その前例をふまえ、2013年度、2014年度には、全クラスがミュージアム見学をすることとして事前に授業スケジュールが立てられるようになりました。こうして、スポーツ健康科学部の学生は全員、1回生の前期に一度は平和ミュージアムを訪れ、スポーツを通して平和教育を見つめる機会を持つことができるようになりました。

なお、2014年度には学芸員の篠田さんの多大なご協力を得て、『ミュージアム見学のしおり』を作成し、見学の事前学習が学生自身でもできるように、一五年戦争の概要や「スポーツ・健康」という視点から戦争・平和に関連する資料についての説明を掲載しました。この『しおり』の作成の目的としては、第一に、学生の基礎知識や教員による事前学習の程度にばらつきがあっても、見学を有意義にするための一定の基礎を提



ミュージアム見学のしおり（一部抜粋）

示したかったということです。スケジュールがそれぞれクラスによって異なるため、事前学習を一齐に行うことができませんでした。そこで、こうした『しおり』を配布し、1回生の学習支援のために各クラスに配属されているアカデミックアドバイザー（AA, 2回生）を中心として、事前の学習を進めてもらいました。

第二に、スポーツ・健康の領域が戦争・平和と関連しているのだということに学生の意識を向けたい、という思いがありました。たとえば、戦時中において、健康な身体を作るというアピールの根底には、強健な兵士を育成するという目的があったことを紹介し、歴史においてはスポーツ・健康が必ずしも平和の創造ではなく、戦争との関連のなかで負の歴史を持つ領域であるということにも気付きを得てほしいと考えました。

また、後期にはBKCにて巡回展が開催される「世界報道写真展」の見学も学部全体に勧めてきました。授業の関係上、すべてのクラス・小集団が見学をするところまでは至らなかったのですが、とりわけ1回生においては、ミュージアム見学によって意識づけられた「平和」の視点が、現代の世界・社会で起こっている事実を前に、彼らにもう一度突きつけられ、彼らをゆさぶることとなったようです。学生の感想からは、「自分たちの生活がいかに関与したものであったのか」「何も知らずに生きているということを知った。私たちには何ができるのだろうか」という自分自身の生き方と平和の問題を考える視点や、「スポーツは文化や人種を超える」という意見のように、スポーツが平和な世界を創造するための一つの重要な手段になりうることに気付いた意見も見られました。

一回生を対象としたこうした取り組みは小さなものです。けれども、学生の学びやキャリア意識にもきつと変化をもたらしていると思われます。

(2)スポーツ健康科学部自主ゼミ

「Sports For Cambodia」のミニ企画展

2014年6月には、BKCの学部には所属する学生としては初めて、学生による「ミニ企画展」が開催されました。スポーツ健康科学部自主ゼミ「Sports For Cambodia」(代表：渡辺空、展示代表：天笠志保、ともにスポーツ健康科学部4回生)による、スポーツを通じた国際平和の取り組みの写真展でした。具体的には、ベトナムにおける教育の実態を示すパネルのほか、メンバーによるベトナム小学校訪問、体力テストの様子の写真が展示されました。当日までには、ミュージアムの塩月さんを中心として、基礎知識を補うパネルの作成や、写真に添えるメッセージなどの検討を丁寧に行っていました。展示準備にかかわった学生は、こうした検討を通して、自分たちの活動を振り返り、さらなる意味づけができたこと述べておりました。

また、(1)で述べた一回生のミュージアム見学の日程とミニ企画展の展示期間がちょうど重なったこともあり、一回生の見学の日に合わせて、ミニ企画展を前に、自主ゼミのメンバーが自らの口で、スポーツを通じた国際協力の取り組みを語る機会を設定しました。一回生にとっても、スポーツ・健康という領域が平和創造に具体的にどのように結びつくのかを考え、自分たちのこれから学ぶべきこと、行動すべきことがより具体的にイメージできるよい機会となったようです。

■ 運営委員として

運営委員として、平和ミュージアムの企画にかかわらせていただいたことも振り返ってみたいと思います。私は教育学を専門にしており、学校現場に赴き、主に英語教育の領域を軸として教師とともに授業づくりを行っております。こうした視点から、平和ミュージアムの豊富な資料をどうしたら学校現場が活用できるかどうかを考えてきたように思います。その一つが、直接的にはほとんどお役に立てておりませんが、2010年の「教材キット」の提案でした。ミュージアムの教材として先行して開発されていた「さいころくん」を参考に、ミュージアムの持つ資料と指導案のセットがあれば、現場の教師たちにとってもアレンジしやすいのではないかと考えました。その後、立命館学園の先生方と学芸員の兼清さんの知恵とご尽力によって、非常にすぐれた教材キットが誕生しています。学

校現場でどう平和教育を行ったらよいのかとお悩みの先生方、是非ご活用ください。

また、2013年度、2014年度の「メディア資料セクター長」として名を賜り、微力ながら関わらせていただきました。ミュージアム1階にある「メディア資料室」には、とりわけ、学習用図書や児童用図書の充実がなされたと考えております。その他、戦争のみならず、歴史・政治にかかわる図書、そしてもちろん平和創造に関わる図書も充実しておりますので、こちらもぜひご活用ください。

■ これからの課題

このように振り返ってみますと、私の関心は、平和にかかわる「専門家」ではない人々(教師・子どもたち)がいかに「壁」を感じず、意気込まなくても行える平和教育とはどういうものか、どうしたら日常のなかでの平和教育が行われるのか、というところにあると思われます。ミュージアムとしてはもちろん、戦争・平和の領域における「専門家」にも学びの多い博物館として存在意義を持たねばならないのですが、すべての人々にとって、日々の生活・実践における平和教育の推進を支える役割も、今後ますます重要になっていくと考えます。

そうした視点においては、立命館大学でさらに取り組みが期待されるのは、教員を目指す学生への「平和教育」の重要性です。平和教育が教職課程に明確に位置づけられ、立命館を卒業した教員たちが平和的な社会の創造に活躍してくれることを期待します。

最後に、自分自身の課題として、学生に見学に行かせるだけや写真展を見せるだけ、という実践しか出来てこなかった反省から、より積極的に何かを成し遂げたいということがありました。これについては、今年度(2014年度)の最後に、「スポーツと平和」に関する写真展(原典は英語であるものを翻訳)を行いたいと準備を始めています。私が担当したクラスの学生(1回生、2回生)が中心となって動き出しています。ミュージアムや報道写真展の見学といった私の小さな働きかけも、このような学生の動きとして小さな芽を出したところです。今後彼らの人生において葉を伸ばし、花開くのを楽しみにしています。

■ おわりに

この5年間、安斎育郎名誉館長、モンテ・カセム館長をはじめ、執行部の先生方、運営委員の先生方、学芸員さんや職員の方々から、平和のとらえ方、平和教育の在り方、歴史、その見方・とらえ方など、本当に多くの学びを頂きました。そのなかで、上記のように私自身の信念や思いにも気づくことが出来ました。大変感謝しております。戦後70年を迎える今年、ミュージアムもまた新たなステージに立つこととなるでしょう。今後もますますの発展を期待いたします。

『1分間英語で京都を案内する』 (KADOKAWA・中経の文庫 2014年3月刊) 広瀬直子 著

立命館大学国際平和ミュージアム
運営委員 白井 豊
(立命館大学法学部教授)



本欄オススメの一冊としては、タイトルからして「平和」を冠したあるいは連想させる「仰々しい」書籍を挙げるべきであったかもしれませんが、あえてそれをしませんでした。私同様「小難しい本は授業や仕事外では真っ平ごめんと考える」読者層を考えたからです。

平和実現のために取り組まれている課題は、安全保障政策からサイバーテロなどの国際犯罪、ODA、軍縮など多方面に渡ります。しかし、この本にそれらに関する議論はありません。筆者も、このような平和を志向する雑誌の推薦図書に選ばれるとは想像もされていないでしょう。この本を端的に紹介するなら「京都を訪れた外国人を英語でもてなすためのハウツー本」と言えるでしょう。京都愛の深い筆者ならではの、「京都の基本」に始まり、「京都の味」「厳選ルート」「行事」「体験」「おみやげ」まで様々な文化を外国人に英語で案内できるよう、日本人をガイドしてくれています。おそらく筆者は、この本を活用してわれわれ自身が「京都」を通して日本文化の再認識・発見をした上で外国人を案内してもらえればこれ幸いと思っておられることでしょう。実際、読んでみますと恥ずかしながら私の知らない「京都、日本」がたくさんあります。また欄外の「キーワード&ワンポイントアドバイス」などは、どこかで聞いた流行語「おもてなし」の心が溢れています。風呂敷や扇子を外国人にプレゼントしたことがあります。そのときこの本と出会っていたら歴史的背景を交えて色々な使い道や楽しみ方をもっと詳しく知ってもらえただろうに……と残念でなりません。

英語の勉強は、会話より文法が中心のわれわれには、伝えたくても伝えられないことが多く、京都にいます

と道案内などで歯がゆい思いをすること、日常茶飯事です。しかしオリンピックも控えて、国策として観光立国を目指そうとする日本。ますます日本、京都を訪れる外国人は増えることでしょう。これを好機にこの素晴らしい京都で、この本を携え国際親善大使も兼ねて、短期留学や小旅行の予行演習を行ってみてはどうでしょうか。

確かに個人間の私的な交流は、世界平和に直結するものではないかもしれませんが。しかし「世界平和貢献」と構えることなく、日々身の幸をを考えていく「思いやり」こそが平和の原点ではないでしょうか。私は今年度、平和ミュージアムに関わる委員ということから、大学1年生たちと本館を訪れて平和について考えましたが、あらためてそのささやかな大切さを強く感じました。

人・物・情報の移動のボーダーレス化が進む中、文明・宗教・価値観の衝突を回避し、多文化共生社会を実現するには異文化理解が必須でしょう。それは「異文化を知る」という一方通行の行為ではなく、自身のアイデンティティへの理解を深める作業との往復から成せるものです。最近の若者たちは「内向き」志向とマイナスに見られがちですが、自国に目を向け、長所短所をよく知ること、異文化理解の基礎となる自身のアイデンティティの確立にベクトルが向いていると捉えることもできるでしょう。この本がその一助となることは上記の通りです。

私ごとではありますがドイツ外留中、街中でドイツ語で尋ねると「英語で話そうか」と言われた記憶があります。「日本に来たのだから日本語で話して」などと「いけず」でなく、「おもてなし」で接する光景が自然と日々の暮らしの中に溶け込んでいる……この本はそんな未来を実現するためのツールのひとつです。この本が気に入ったのは、そんな未来の実現への取り組みは、世界平和への貢献に対する日本の安全保障政策のあり方や国際平和構築のため果たすべき役割などの課題を考えることと同じくらいの重みを持っていると思うからです。

開催報告（2014年10月～2015年1月）

今号では2014年10月から2015年1月の間に開催しましたミニ企画展示をご紹介します。

第89回 第8回立命館附属校 平和教育実践展示 2014年10月12日(日)～2014年12月19日(金)

立命館附属校の平和教育実践展示は2007年度に第1回を開催し、今回が8回目の開催となりました。この展示は、展示物を通じて初等・中等教育段階での平和・人権教育の実践内容を紹介することで、今日の小学生、中学生、高校生の平和や人権課題に対する意識を広く知ってもらおうとするものです。2014年度は下記の日程で開催しました。各校の展示の様子は、19頁をご覧ください。

[日程]

立命館守山中学校・高等学校 10 / 12(日)～10 / 24(金)

「立命館守山中・高の平和学習の取り組み」

立命館小学校 10 / 26(日)～11 / 7(金)

「子どもたちの平和ポスター」

立命館宇治中学校・高等学校 11 / 9(日)～11 / 20(木)

「歴史と現在の平和をつないで」

立命館中学校・高等学校 11月22日(土)～12月5日(金)

「立命館中学高等学校 平和教育実践展示」

立命館慶祥中学校・高等学校 12月7日(日)～12月19日(金)

「もうすぐ20周年 北の立命館が考える平和」



バルサ材を使ったMessage Tower
(立命館慶祥中学校・高等学校)

第90回 ミュージアム・この1てん 「アウシュヴィッツ解放70年特別展示」 会期：2015年1月10日(土)～1月31日(土)

1945年1月のソ連軍によるアウシュヴィッツ絶滅収容所解放から今年で70年になるのを記念し、特別展示を開催しました。アウシュヴィッツ絶滅収容所は1940年にナチスがポーランドに開いたナチス最大の強制収容所で、ユダヤ人を筆頭にシンティ・ロマや同性愛者、精神病患者など約130万人が送られ、約110万人が殺害されました。収容所に送られた人々は到着後すぐに、強制労働に従事させられる者とそうでない者に振り分けられ、労働力とされなかった老人や子どもなどはそのままガス室で殺され、焼却炉で焼かれました。

照明を抑えた会場にはアウシュヴィッツ第二収容所（ビルケナウ）の写真为背景に、収容所で残されていたわずか18cmの子どもの靴やフォークの塊が展示されました。会場の一角では、収容所から奇跡的に生還したプリーモ・レーヴィ（化学者・作家）やヴィクトル・E・フランクル（精神科医・心理学者）、そしてアウシュヴィッツに送られた父の体験に基づく作品で知られるアート・スピーゲルマン（漫画家）を紹介し、近年現地で撮影した写真（提供：由城真衣氏）などを展示。また総面積約190ヘクタールにおよぶ第一、第二、第三収容所の俯瞰図を、現在の京都市街地図での面積比較とともに展示しました。館内のメディア資料室には関連図書コーナーを設け、アウシュヴィッツに関する書籍を多数紹介しました。会期中の1月27日には解放記念日を迎え、虐殺の悲劇を二度と繰り返してはならないことを胸に刻む展示となりました。

<来館者の感想>

入口から展示をみたときにちょうどガス室へ続く線路の上に子どもの靴が置いてあるように見えて印象的でした。たった2点しか展示してないなかでもその2点が放つメッセージ性が強く、解放70年の重さを感じさせた。
(立命館大学文学部4回生)

自分と異なる考え方に対しても先入観をもたずに耳を傾ける柔軟さを忘れないようにしたいと思います。
今日はありがとうございました。(京都府主婦40代)



アウシュヴィッツの遺品と収容所の写真



子どもの靴

世界報道写真展2014 —WORLD PRESS PHOTO 14—

立命館大学衣笠キャンパス（KIC）会場

会 期：2014年9月17日(水)～10月12日(日)
会 場：立命館大学国際平和ミュージアム
中野記念ホール
参観者：5,101名



衣笠キャンパス会場の様子

立命館大学びわこ・くさつキャンパス（BKC）会場

会 期：2014年10月14日(火)～10月30日(木)
会 場：立命館大学びわこ・くさつキャンパス
エポックホール
参観者：1,627名



びわこ・くさつキャンパス（BKC）会場の様子

主 催：立命館大学国際平和ミュージアム、朝日新聞社、世界報道写真財団

後 援：オランダ王国大使館、公益社団法人日本写真協会、公益社団法人日本写真家協会、京都府、京都市（衣笠キャンパス開催分）、京都府教育委員会、京都市教育委員会、京都市内博物館施設連絡協議会、NHK京都放送局（衣笠キャンパス開催分）、KBS京都、滋賀県、草津市、大津市、滋賀県教育委員会、草津市教育委員会、大津市教育委員会、NHK大津放送局（びわこ・くさつキャンパス開催分）びわ湖放送株式会社

協 賛：キャノンマーケティングジャパン株式会社

<衣笠キャンパス>

講 師：豊田直巳氏（フォトジャーナリスト）
日 時：2014年10月7日(火) 3時限
授 業：「戦争の歴史と現在」担当：池尾靖志
立命館大学衣笠キャンパス 以学館4号教室
聴講者：154名

<びわこ・くさつキャンパス>

講 師：豊田直巳氏（フォトジャーナリスト）
日 時：2014年10月14日(火) 2時限・3時限
授 業：「平和学入門」担当：藤岡惇
立命館大学びわこ・くさつキャンパス
コラーニングハウスⅠ C401教室
聴講者：2時限298名・3時限295名 計593名

立命館アジア太平洋大学（APU）会場

会 期：2014年11月2日(日)～11月16日(日)
会 場：立命館アジア太平洋大学 本部棟2階 コンベンションホール
参観者：1,972名

主 催：立命館大学国際平和ミュージアム、立命館アジア太平洋大学、朝日新聞社、世界報道写真財団

後 援：オランダ王国大使館、公益社団法人日本写真協会、公益社団法人日本写真家協会、大分県、別府市
大分県教育委員会、別府市教育委員会、NHK大分放送局、大分合同新聞社

協 賛：キャノンマーケティングジャパン株式会社

協 力：別府商工会議所、社団法人別府青年会議所、大分交通株式会社、亀の井バス株式会社

2014年で57回目を迎えた「世界報道写真展」。立命館大学では1995年から毎年開催しています。展示される作品は、オランダに本部を置く世界報道写真財団が毎年開催している「世界報道写真コンテスト」の入賞作品約140点で構成されます。

2014年の大賞には、アメリカの写真家ジョン・スタンマイヤー氏の作品が選ばれました。アフリカからヨーロッパや中東に向かう移民の通過地点であるジブチで、近隣のソマリアからの安価で微弱な携帯電話の電波を頼りに、祖国に残った家族となんとか連絡を取ろうとする移民たちの切実な思いが見て取れます。スポットニュースの部・単写真1位のフランスのフィリップ・ロペス氏の作品では、2013年の台風30号で被害をうけたフィリピン・レイテ島で、生存者によって行われる宗教行事の様子が映し出されていました。背景には災害の傷跡が生々しく残っており、そのすさまじさが伝わります。そしてこれがわずか1年前のことであったことが改めて思い起こされます。

生存が脅かされる野生動物、アメリカにおけるDV問題を扱った作品、ボストンマラソンでの爆弾テロや犯罪、シリア内戦など、国内では報道されることの少ない写真も多数並び、見る者に強く訴えかけてきます。

いずれの会場も多数の方々にご来場いただきました。写真一枚一枚に向き合うことで、「世界で今、何が起きているのか？」を受け止め、「平和とは何か？」を考えていただく機会となりました。

今年度は、授業のテーマにそった形で世界報道写真展をも含む形での講演を行いました。講師は、授業におけるゲストスピーカーと位置づけて講演を行いました。

世界報道写真展の受賞作品の中には、紛争の続く地域の写真作品も多く、「平和学入門」および「戦争の歴史と現在」の授業において、フォトジャーナリストの豊田直巳氏を講師にお招きし、平和の構築とジャーナリズムのあり方について講演いただきました。

世界報道写真展参観者の感想

- ジャンルは違えど、どれも全て興味深かったです。世界で何が起こっているのか、知ることはできましたが、それと同時にこれはほんの一部であること、日本以外のことは知らないことが多いことに気づかされました。自分の生活の中でも時々脳裏に浮かぶような写真ばかりだったと思います。

(大学生、20代、兵庫県)

衣笠キャンパス会場

- 非常に興味深いものでした。「何故このようになったのか」自分たちで調べるきっかけがくれたと思います。平和とは過去から求めるものでなく現状を知り自身に何ができるのか、何かアクションをおこすことが必要。

(10代、高校生)

世界報道写真展参観者の感想

- ボストンのマラソンのテロやシリアの内戦など、新聞やNEWSで知識として頭に入れていました。しかし、今回の特別展を見学し、知識として知るだけでなく、何を学び何を考えるべきか次のステップを踏む必要があるのではないかと思います。これは、「あたりまえ」のことなのかもしれませんが、日常の生活の中ではそんな「あたりまえ」な事も考えていないことに気づかされました。「あたりまえ」に気づ

びわこ・くさつキャンパス会場

き考える。そんな機会になりました。

(大学院生、20代、奈良県)

- 日本の報道では見ることができない、現場の写真がいくつかあり、真実を知ることができ、ためになった。世界には様々な人々がいて、当然自分もその一人なのだが、もっと広く深く知らない世界を知る必要があると感じた。

(大学生、20代、草津市)

世界報道写真展参観者の感想

- 私は今、動物の殺処分を減らす問題に取り組んでいますが、今回の展示で自分の取り組んでいる問題は、数多く存在する問題の中の断片に過ぎないのだなと実感しました。また実際に見聞をされてきた方々の写真は、ニュースや新聞等で入ってくる情報よりも身に染みました。この展示会を通じて、自分の無知を再認識させられました。非常に興味深い内容でした。ありがとうございました。

(大学生、20代、別府市)

立命館アジア太平洋大学会場

- 現地の現実を見せてくれる写真の力を感じさせられます。動画と比べての優劣というより、静止した画像からだけ感じられるもの、あるいは人がそうした特性をもっているということに訴えかけてきているように思います。毎年の報道写真展を楽しみにしています。また今後とも大分県内、APUでの開催を期待しています。

(教育関係者、30代、大分市)

「ピース☆スタイル」

会 期：2014年10月21日（火）～12月14日（日）
会 場：立命館大学国際平和ミュージアム 中野記念ホール
参観者：12,366名
主 催：立命館大学国際平和ミュージアム
後 援：京都府、京都市、京都府教育委員会
京都市教育委員会、京都市内博物館施設連絡協議会
NHK京都放送局、KBS京都、朝日新聞社、京都新聞
毎日新聞社、読売新聞社

10月21日（火）から12月14日（日）にかけて、2014年度秋季特別展「ピース☆スタイル」を開催しました。

戦後日本社会の中で市民による平和のための生き方やスタイルを模索する様子を紹介するため、1950年代から現代までの資料約200点と、1960年代後半より京都ベ平連を中心とする市民運動に参加した経験を持つ方々による座談会の記録や、安保反対運動の映像等を展示しました。

展示の中心となったベ平連（ベトナムに平和を！市民連合）の紹介では、立教大学共生社会研究センターや小田実氏のご遺族をはじめ、多方面から資料を貸出・ご提供頂き、ベ平連誕生のきっかけとなった資料や、米脱走兵支援の様子を伝える資料を展示しました。

展示資料としては、『週刊アンポ』（1969年創刊）、『ベトナム通信』（1967年創刊）などの印刷物が挙げられます。当時は広く考えを周知し、共有するための手段は紙媒体（ニューズレターやミニコミ誌）が中心であり、遠方との通信も葉書や書簡でした。また、マスメディアによる報道と共に、デモや集会、喫茶店などでの直接対話が運動をはぐくんでいました。高度成長や公害など国内の発展と、その矛盾が吹き出す時代の中で開催された万博や反博（大学のベ平連やフォークゲリラ、橋の下大学などが参加して開催した「反戦のための万国博」）なども紹介しました。



展示会場の様子



メッセージコーナー

この時期に成立した市民運動の自由なスタイルは現在にもつながり、最近ではステッカー、バッジ、チラシやTwitter、Facebook、Ustreamといったメディアの利用、打楽器を用いたサウンドデモや、シャボン玉を吹きながら行進するシャボン玉パレードなどが広がっていることも紹介しました。

展示会場内では、参加型展示としてメッセージコーナーを設け、「あなたがピースだと思ふひと・もの・ことは？」「市民運動の参加体験は？」の問いに自由に記載して頂き、掲示しました。数多くの自由な感想が寄せられました。

●関連イベント 公開記念上映会「イントレピッドの4人」

日 時：2014年11月15日（土）13:00～14:30

会 場：立命館大学衣笠キャンパス 充光館地階301教室

司 会：加國尚志（立命館大学国際平和ミュージアム副館長、立命館大学文学部教授）

講 師：大野光明（大阪大学グローバルコーポレーションセンター特任助教）

関谷 滋『となりに脱走兵がいた時代—ジャテック、ある市民運動の記録』著者

参加人数：35名

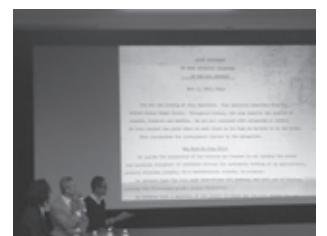
11月15日（土）には関連イベントとして、映画上映とトークイベントを開催しました。『イントレピッドの4人』は、1967年にベ平連（ベトナムに平和を！市民連合）が製作した脱走米兵の記録映画です。1967年10月に横須賀に停泊中の空母イントレピッド号からベトナム戦争に反対する4人の水兵が脱走する事態が起こり、ベ平連有志は彼らを出国させた後、この事実を記者会見で公表しました。脱走兵支援活動は一般の市民により支えられており、市民が国境・国家を越えて非暴力の直接行動を行う実践として国際社会にインパクトを与えました。

上映後、加國尚志副館長司会のもと、大野光明氏、関谷滋氏を迎え、トークを行いました。大野氏は、当時のベ平連の活動が幅広い人々への「呼びかけ」であったこと、ゆえに「共感」がもたらされたことを指摘しました。当時JATEC（反戦脱走米兵援助日本技術委員会）の活動家でもあった関谷氏は、著書『となりに脱走兵がいた時代—ジャテック、ある市民運動の記録』（1998年思想の科学社）の内容にも触れ、当時の市民運動の様相や自身の体験を紹介しました。

4人の脱走兵が書いた書面（記者会見で話した内容）など、当時の資料を交えてのお話は、充実した内容となりました。



加國尚志副館長（左）
関谷滋氏（中央）、大野光明氏（右）



上映会後のトークの様子

特別展見学者の感想より

- 改めて、この世界には平和（Peace）が足りないと思いました。わたしはこの展覧会をみて幸せとは？平和とは？など、どのようになっていくのか、不思議になりました。私たちが戦争をなくす努力をしなければ、この世界に平和は来ないと思います。私たちが努力することで、平和がうまれるんだと思いました。（10代、小学生、三重県）
- 平和というものに対する過去から現在までに至る様々な人々の様々な活動が広く展示されており、色々な考え方に触れることができてとても勉強になりました。こういう思いの1つ1つが平和へとつながっていくのかと思うと感慨深く、私も何かしないといけないという気持ちになりました。（20代、大学生、京都市）
- 歴史を学ぶことは、現在を知ること。現在を知ることとは未来を考えること。歴史学は、一種の未来学であると思う。日本の反戦運動が国境を越え、人間の内部に働きかけ、ベトナム反戦運動でのアメリカ兵の脱走などの事件に胸打たれた。時代を超えても、人は皆、同じもので本来つながると感じた。（20代、大学生、大阪府）
- 以前の人たちもかつて三条大橋下に集まったり市役所前～円山をデモしたりしたんだなあ。今、同じように私たちも平和のこと、戦争はいらないってことや、原発いらないよ、ってことなんかを考えながら歩いています。そのことにとても勇気づけられます。かつての人たちが一生懸命求め続けてきた戦争のない世界。私たちも続けていきたいです。（30代、会社員、京都市）
- 今、反基地運動や原発運動に取り組んでいるが、長い歴史の中に自分がいるようでとても励まされました。（30代、大学生、京都市）
- 私の知らない時代もあるので興味深かったが反面、現代的な世代との比較・対照をもう少し感じたいと思いました。また、当時の中高年代や反対勢力（つまり保守派）の考え方・とらえ方ももう少し知りたいと感じました。当時の若い反戦世代が現在の平和に大きく寄与したと改めて感じました。（30代、自由業、京都市）
- 戦後70年を来年にひかえ、一見すると体制におもねて生きているようにみえるが、40～50代以

上の人たちの中には相当に危機意識をもっている人も多い。当時は若者たちが社会に関心を持ち、発信する力をもっていたが、今はそれが20代、30代の若者に語り継がれ引き継がれていけないことがとても残念に思う。その意義からもこうした特別展を貴館が続けられることに敬意を表すと同時に教育関係者として衿を正していきたいと思った。（40代、教育関係者、愛知県）

- 大学がこのような展示を行うこと自体、日本では画期的だと思います。ぜひ、続編を期待しております。企画に関わられた方々の努力に敬意を表します。（30代、長野県、大学教員）
- いつまでも続けて欲しい。思想の科学、声なき声、ベ平連から脈々と続き、息吹いている市民の動きは、常に1人1人、根本的でしかも社会に根を張ったものだと思えて感じさせられ、私個人の力にもなる。（50代）
- 長崎ベ平連の誕生に立合い、その後佐世保ベ平連に転じてベトナム戦争終結まで運動を続けた。基地経済に依存する部分が大であった。（現在も変わらない）佐世保での活動は、米原子力空母エンタープライズ寄港反対闘争の巨大なうねりが収まってしまっただけからは困難を極めた。自分たちにとっては当たり前の行動が周囲からは「過激」だと見なされた。しかし、「自分たちは決して間違っていない」という思い（それは思想と呼べるほど強固なものでなかったかも知れないが）が自分自身を高揚させたという体験は参加者全員に共通するものであったと思う。あの頃、みんなでワイワイいいながら作ったポスターに再会して、あれからもう45年も経ったのか、という感慨ひとしお。（70代以上）

公開記念上映会参加者の感想より

- お二方の解説がとてもよかった。とても今日的な問いを含んだ映画と展示トピックだったと思う。（20代、大学院生、兵庫県）
- 日米安保軍事問題を考える、考えざるをえない。兵役を拒否するのは大変信念がいると思った。『週刊アンボ』の読者としては絶えず平和のあり方を自分に問い続けたいといけな。い。（60代、元会社員）

「わだつみ像」と不戦のつどいのこと

不戦の誓いを新たにする第61回不戦のつどい（主催：不戦のつどい実行委員会）「わだつみ像」前集会が、2014年12月4日にミュージアムロビーで、5日には「嵐の中の母子像」前集会がびわこ・くさつキャンパス（BKC）にて開催されました。

1949年10月、東京大学協同組合出版部から『きけわだつみのこえ』という戦没学生の手記が刊行され、広く普及しました。「わだつみ像」はこの刊行収入をもとに日本戦没学生記念会（わだつみ会）が計画したもので、アジア太平洋の戦争の戦場に出征し、生きて帰ることのなかった戦没学生を記念する像として、1950年8月15日に完成した本郷新（1905～1980）の作品です。当初、東京大学構内に設置する予定でしたが、朝鮮戦争さなかの1950年12月に評議員会が拒否、その背景には日本を占領していた連合軍の意向も働いたと言われています。東大では「わだつみ像設置拒否反対集会」が開かれましたが、結局、設置場所は定まらず、「わだつみ像」は本郷氏のアトリエに置かれることになりました。1951年、立命館大学の末川博総長が「わだつみ像」を引き受ける意思を表明したことをきっかけに、学内外からの強い支持も寄せられ、1953年12月8日、太平洋戦争開戦の記念日に戦火に斃れた若人の苦悩を表した戦没学生記念像「わだつみ像」は、立命館大学での建立除幕式を迎えるに至りました。翌1954年からは、12月8日前後に「わだつみ像」の前で「不戦のつどい」が開かれるようになり、立命館の伝統行事として今日まで続けられています。

建立されたわだつみ像の台座に、末川博総長は「像と共に未来を守れ」の文字とともに、次のように記しました。

「未来を信じ未来に生きる。そこに青年の生命がある。」

その貴い未来と生命を聖戦という名のもとに

奪い去られた青年学徒のなげきと怒りともだえを象徴するのがこの像である。本郷新の制作。

なげけるか いかれるか はたもだせるか きけ はてしなきわだつみのこえ

この戦没学生記念像は廣く世にわだつみの像として知られている。

一九五三年十二月八日 立命館大学総長 末川博しるす」

2015年戦後70年、12月に開催される第62回不戦のつどいについては、当時の息吹を蘇らせる必要があります。

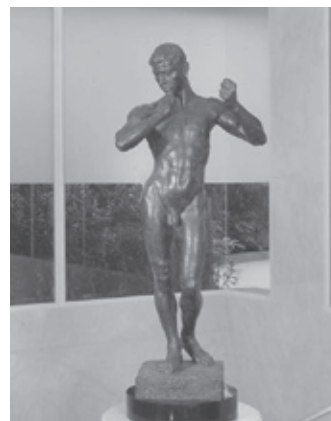
2015年4月、立命館大学は大阪いばらきキャンパス（OIC）を開設します。戦後立命館学園が「平和と民主主義」の教学理念を慈しみながら、さらなる発展の礎石として「立命館憲章」を定めた道筋の中で、学園が国際平和ミュージアム創設にこめた思い、その後国内外で果たしてきた役割、平和創造への大学の社会貢献の面で大学が果たすべき役割への期待など、そのふさわしいあり方について共同の議論や意見交換ができる企画として再構築する必要性を痛感しています。

*「わだつみ」は、同書刊行に当たって募集された書名の中から、藤谷多喜雄氏の「なげけるか いかれるか はたもだせるか きけ はてしなき わだつみのこえ」に由来する。

*当館の「わだつみ像」は、本郷新が1950年8月15日に制作（右足下に「1950.8.15 Shin Hongo」と刻印）。これより2ヶ月前の6月にエスキース（習作）を制作（右足下に「1950.6 Shin.Hongo」と刻印）、エスキースは、2015年3月より末川記念会館にある末川博メモリアルホール応接室にて展示予定。



わだつみ像除幕式（1953.12.8 広小路学舎）
（1950 年制作 1953～1969）



現在のわだつみ像（国際平和ミュージアム）
（1970 年再鋳像 1976 年衣笠図書館に再建立 1992 年移設）

年表：学徒出陣、わだつみ像、不戦のつどい

- 1943年：学徒の徴兵猶予が停止、学徒出陣。朝鮮・台湾学生の徴兵と非志願学生への除名処分が行われる
- 1945年：アジア・太平洋戦争終戦
- 1949年：『きけわだつみのこえ：日本戦没学生の手記』刊行
- 1950年：日本戦没学生記念会（わだつみ会）発足、戦没学生記念像の計画が決定。6月朝鮮戦争が始まる。
8月15日 本郷新により「わだつみ像」が完成、12月東京大学評議員会において像の建立が否決
- 1953年：12月8日 立命館大学広小路学舎にて「わだつみ像」の建立
- 1954年：12月8日 第1回不戦のつどい開催。その後、毎年欠かさず12月、不戦の集い「わだつみ像」前集会を開催。
BKCでは、1994年から「嵐の中の母子像」前で開催
- 1969年：5月20日 大学紛争の嵐のなか、「全学共闘会議」による「わだつみ像」破壊
- 1970年：「わだつみ像」再建、新像と破壊された像二体を前に第17回不戦の集いを開催
- 1976年：わだつみ像再建立記念式典が開催され、衣笠の図書館に再建立
- 1992年：国際平和ミュージアムの開設 わだつみ像を図書館から移設
- 1993年：学徒出陣50年企画 第40回不戦の集い、「学徒出陣50年にあたって一私立大学総長・学長の共同声明」を発表
- 1996年：非志願の朝鮮・台湾学生の除名処分を取り消し、特例卒業証書授与式を挙行
- 2006年：「立命館憲章」を制定
- 2010年：「わだつみ像」生誕60年
- 2013年：学徒出陣70年、「わだつみ像」建立60年、第60回不戦のつどい開催

文字・活字文化の日 「平和ってなに色？」

「文字・活字文化の日」は、2005（平成17）年に制定された「文字・活字文化振興法」により10月27日と定められています。文字・活字文化が人類の知識および知恵の継承や、豊かな人間性の涵養、健全な民主主義の発達に欠くことができないものであり、国民の間に広く関心と理解を深めることを目的としたものです。

立命館大学国際平和ミュージアムと立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所とは、「文字・活字文化の日」特別共同企画として、平和と言葉について考え、表現しようという催し「平和ってなに色？ 漢字一字であらわす平和へのメッセージ」を、2014年10月28日（火）から11月3日（月・祝）に行いました。この催しでは、平和への思いを一つの文字で表していただき、その一字にこめられたメッセージを記入していただきました。

たくさんの方にメッセージを記入いただきましたが、特に小学生のみなさんが多くのメッセージを寄せてくださいました。挙げられた文字は全部で64種類。同じ漢字一字でも、それぞれ様々なイメージ・思いがこめられていました。



「平和ってなに色？」漢字カード

メッセージを書いてくださった方には、「平和ってなに色？」漢字カードを1枚ずつプレゼントしました。このカードは、白川静記念東洋文字文化研究所が制作したもので、色の名前10種類の漢字について、古代文字やその成り立ちなどを解説したものです。平和を願う心と漢字への興味を持つきっかけになればと願っています。

「漢字一字で表す平和へのメッセージ」まとめ
総数 212のメッセージが寄せられました。

◎ランキングトップ5とコメント（小学生）

- ① **和** (17) …世の中がすべて平和になればいいのに。
人々が和やかにすごせるように。
- ② **笑** (16) …平和とはみんなが笑顔でいるということ
だと思ったから。
笑顔がある国が平和！
- ③ **平** (14) …同じ人間なので戦争で人の命を殺したり
することはおかしいと思います。
どの人も平等であるべきです。
- ④ **幸** (13) …みんなが幸せだと平和だなあと思うから
- ⑤ **命** (11) …いのちはたいせつだから。そまつにして
はいけないから。

◎トップ5外から（小学生）

- 輪** …世界中の人が輪のようにつながり、仲良くできるように…
- 等** …みんな等しくなければ、平和は生まれない
- 勇** …勇気を出して自分の思いを伝えて、平和に自ら変えていく
- 常** …平和とは、通常・平常が第一だと思うから。
平和は平常の常だと思った。
- 空** …いつでもきれいな空を見上げることが出来る
というのは、平和だと思ったから。
- 手** …手をつなぐと安心するし、手がないと何もできないから

「生き方探求・チャレンジ体験」 ～京都市立中京中学校2年生1名を受け入れ～

2014年11月11日（火）から14日（金）までの間、京都市教育委員会主催による「生き方探求・チャレンジ体験」推進事業の一環で、京都市立中京中学校2年生1名を受け入れました。

当館の職業体験は、博物館業務のなかで直接来館者に接する受付業務と展示解説を中心に行いました。開館準備作業やチケットやアンケートの整理などの作業もまじめに取り組んでいました。「平和へのメッセージ」の貼り替え作業では、きれいに書けたものだけでなく、平和についての思いがしっかり書かれているものを考えながら選んでいました。

11月12日（水）には、モンテ・カセム館長による平和講義を受講される見学団体があり、会場準備と撤収の間に聴講する機会もありました。館長からは激励の握手をしてもらいました。「ちょっと難しかった」と感想を述べながらも広く・深く学ぶことの大切さを考えているようでした。

展示解説は2階常設展「京都平和史跡めぐり」のなかで京都府立植物園について来館者に説明し、お礼の言葉をかけてもらい、やりがいと自信を持てたようです。最初は緊張して解説文を暗記していましたが、学生ミュージアムスタッフから話し方についてアドバイスを受け、自分も理解し相手に合わせてわかりやすい言葉を選ぶなど工夫もしていました。最後にボランティアガイドのみなさんにも展示解説を聞いていただき、解説文には書かれていない、その当時の実体験も伺うことができました。

こうした体験と交流を通じて博物館業務にもいろいろな部分があることを発見でき、当館が伝える「平和とは何か」ということについても学んでくれたことと思います。



展示解説の様子
（2階展示室「平和をはぐくむ、京の人々」）

2014年度 第2回NGOワークショップ 「エネルギーと平和—未来のためにわたしたちができること—」

開催日時：2014年11月22日(土) 14:00～15:30

講師：伊与田 昌慶氏
(特定非営利活動法人 気候ネットワーク研究員)

場所：国際平和ミュージアム
2階ミュージアム会議室

対象：大学生、大学院生

参加者：13名

企画：国際平和ミュージアム学生ミュージアムスタッフ
齋藤 怜 (産社3)、奥野彰子 (文2)
岩井友美 (産社2)、鈴木奈月 (国関1)

例年、国際平和ミュージアムでは学生ミュージアムスタッフが主体的に企画・実施するNGOワークショップを開催しています。企画メンバーとなった学生たちは、2階常設展示室で紹介している12のNGO団体の中から、依頼する団体を決定します。

今回は気候ネットワークより伊与田昌慶氏を講師に迎え、生活に不可欠なエネルギー問題について、以下のような手順でワークショップを実施しました。

①導入：現代のエネルギー問題の概要と、気候ネットワークの活動について②グループワーク：家庭のコンセントから発電所までがどのようにつながっているのか、またその間に発生する問題を書き出し、解決方法をディスカッション③各グループによる発表④講師によるまとめ

各グループとも活発にディスカッションを行い、学生からのたくさんの質問に講師が一つ一つ答え、大変有意義なワークショップとなりました。参加した学生には、今回のワークショップで深めた学びを、今後のミュージアムでの活動や、自身の生活に活かして欲しいと思います。



講師の伊与田氏(前列左から3人目)
と参加した学生たち



グループワークの様子

第21回日本平和博物館会議に参加して

2014年11月13日～14日、長崎原爆資料館にて第21回日本平和博物館会議が開催されました。1日目は、戦争の記憶を次世代へ語り継ぐ上での課題や取り組み、平和の諸課題を展示内容へ反映させる方法、戦後70年を記念した共同巡回展の可能性などについて協議されました。

戦争の悲惨さを知り、平和の大切さを学ぶため、平和博物館の多くは体験者に証言をしてもらい、来館者がそれを聴く機会を提供してきました。平和博物館は同時代の人々の記憶に触れることができる貴重な場です。しかし体験者は減少しており、その中で語り継ぐ取り組みとして、広島平和記念資料館による「被爆体験伝承者」や、長崎原爆資料館による「語り継ぐ家族の被爆体験(家族証言)」の取り組みなどが紹介され、意見交換が行われました。

その後、原爆資料館や国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館の展示見学、意見交換会、稲佐山展望台の見学があり、美しい長崎の夜景を見ることができました。

2日目は長崎原爆資料館に案内をいただき、山王神社二の鳥居や旧城山国民学校校舎など、長崎の原爆遺構を被爆当時の写真と見比べながら視察しました。原

爆で片側が崩壊し、一本柱となった山王神社の鳥居は、現在は住宅に囲まれ、石段下から見上げれば後ろにマンションがあります。被爆校舎の一部を残して平和教育に活用していることで知られる城山小学校ではボランティアの案内で被爆校舎を見学し、発掘調査が進む被爆校舎基礎部分の遺構も見ることができました。また、斜面には当時退避用に使われていた横穴が今も残されています。被爆直後は、すべてが崩壊し、焼け落ちた爆心地にコンクリートの建造物が形骸を残すのみでしたが、今はそれらの遺構が、坂の多い街並みに突き刺さるように残されています。

(学芸員 兼清順子)



発掘調査中の城山小学校校舎の
基礎部分

平和教育の大きな節目を迎えて

～立命館附属校平和教育実践展示～

立命館大学国際平和ミュージアム運営委員

一貫教育部部長 田中 博

国際平和ミュージアムにおいて、10月12日～12月19日の間、立命館附属校での平和教育実践を多くの皆様にご覧いただく展示企画を開催しました。これは、立命館中高、立命館宇治中高、立命館慶祥中高、立命館守山中高、立命館小学校での教育実践報告を各校約2週間ずつの期間で報告する企画として、今年で8回目を迎えました。

まもなく戦後70年を迎える節目であるとともに、子供たちを取り巻く環境が急速にグローバル化し、平和教育というものをこれまでよりもさらに幅広くとらえていく必要に迫られる節目でもあります。命や人権を保障され、食べ物や様々な物資に恵まれた国、日本で生活する子供達が、多くの海外の子供達と交流する時、そこでは、食べ物に困る人々や、命の危険を感じながら生活する人々の思いが一気に近く感じられます。世界には飢えに苦しむ人が9億人とも言われていますし、少年兵として戦争に駆り出される小さな子供達が25万人いるとも言われています。これが世界の現状です。そのことを日本の子供達が知り、世界のために貢献することを出来るだけ小さな頃から学ばせることは重要な教育の使命だと考えています。そのような一環で、各校とも平和教育に関わる実践に力を注いでいます。その一端を多くの皆様にご覧いただき、さらなるご指導等をいただければと願っての開催でした。

今年の展示を開催順に紹介しますと、次のような内容でした。

立命館守山中高からは、長崎平和研修の報告「14歳が見たナガサキ」、平和オブジェ「SMILE PEACE EARTH」、「平和クイズオブジェ」、「長崎原爆資料館コンクール『世界平和祈念ポスター展』参加作品」等を出品しました。

立命館小学校からは、「5年生が考える平和とは…」として、広島宿泊体験学習で学んだ「戦争、原子爆弾」や、8月のワールドウィークで体感した「国際理解、国際交流」を子どもたちの平和ポスターの形で表現しました。

立命館宇治中高からは、「歴史と現在の平和をつないで」をテーマに、東アジア青少年歴史体験キャンプ(in 韓国)でのポスター、資料、写真、中2歴史で取り組

んだポスター「『歴史の中の事件』の戦争と平和」等の展示を行いました。

立命館中高からは、中2「沖縄平和研修」での事前学習・生徒レポート・研修の様子等、高2近現代日本史で取り組んだレポート「戦争体験者に直接お話を伺う」、「立命館中高創立90周年戦後50年記念『90/50企画』平和宣言」等の展示。

立命館慶祥中高からは、中1社会科「平和を考える川柳」、中2美術「平和をテーマに」、中3社会「学年討論会」、高1学年学習会「北方領土をどうするか?」、高3アジア学「共生を考える」の展示を行いました。

参加いただいた方々からのアンケートでは、「ポスターを見てはっとさせられました」「一人ひとりが真剣に向き合っている思いが感じられました」「このようなことが日本で起こったということを忘れずに若い人たちへと引き継いでいくことが重要だと思いました」「どんな意見を持っているかよりもまず自分の意見をしっかり持つことが大事なんだと思いました」「テレビで流れるニュースなどをそのまま鵜呑みにしてしまうのではなく、自分で調べて自分で情報を消化している、その姿勢がとてもいいなと思いました」「平和についてそれぞれの考えや思いがひとつにつながっていると思う」「隣国の同世代との交流を通して、視野を大きく広げた様子が伝わってきてとても感心しました」等、多くの励ましの言葉をいただきました。見学いただいた多くの方々へ心より感謝申し上げます。

今回の展示企画開催にあたりご尽力賜りました多くの皆さまにも重ねて御礼申し上げます。今後もこのような展示をきっかけにして、子供達がさらに世界の平和について意識し、未来へ向けて貢献していける生徒達に成長してってくれるよう、各校での平和教育をさらに発展させ、その発信に努力していきたいと強く願っています。

戦後70年の節目の年に、世界の平和、日本の貢献について、今一度しっかりと議論し、新しい教育へ向けて動き出せればと期待しています。皆さま方におかれましては、引き続きご指導、ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

(各附属校による展示の様子)



立命館守山中学校・高等学校



立命館小学校



立命館宇治中学校・高等学校



立命館中学校・高等学校



立命館慶祥中学校・高等学校

アメリカの平和博物館 刀を鋤にギャラリー・平和センター

立命館大学国際平和ミュージアム

副館長 山根 和代

(立命館大学国際関係学部准教授)

アメリカのミシガン州のデトロイトに、「刀を鋤にギャラリー・平和センター(The Swords Into Plowshares Gallery and Peace Center)」があります。1985年にジム・プリスター夫妻(Jim & Jo Bristah)が創設し、セントラルメソディスト教会の建物の中にあります。

このセンターでは、芸術の創造性と影響力を生かして、世界平和のために人々を教育していくようにしています。1992年英国ブラッドフォード大学で第1回平和博物館国際会議が開催された際、私はこの平和センター館長のジム・プリスター氏と出会いました。当時私は高知市にある平和資料館「草の家」の代表として参加しました。ちなみに国際平和ミュージアムからは、薬師寺公夫先生が参加されました。1995年被爆の実相を展示する計画がスミソニアン国立博物館で実現しなかった時、「草の家」からヒバクシャの写真パネルを送りました。さらに市民が折った鶴を送りましたが、その後この平和センターを訪問しましたら「折り鶴コーナー」が設けられていました。

1998年にはそのセンターから、戦争の危険を警告する版画が「草の家」に贈られてきました。イラク戦争が始まる前には、戦死するかもしれない人々の絵画を若者が制作して展示していました。近くにあるウェイン州立大学の平和紛争研究センターとの交流もしていて、私はそこの平和学担当の教員と交流をすることができました。最近この研究センターを大学が閉鎖するという動きがあり、平和センターのウェブサイトでも閉鎖に反対する署名を集めています。

最近は演劇や写真展示、また絵画展をしていることを、その平和センターのウェブサイトにあるニュースレターで知ることができます。2014年にはシリア系アメリカ人のイラム・B・マーフォウズ(Ilham B. Mahfouz)さんの絵画や彫刻の展示をし、収益金の一部をシリアの人々の医療費のために寄付したそうです。デトロイトはアフリカ系アメリカ人が多く、人種問題が大変深刻です。私は2008年国連で平和教育国際会議に参加した後で、デトロイトを訪問しました。荒れ果てた住宅地があり、空き地を畑にして若者と野菜を栽培し、収穫した野菜でパーティをする取り組みを地域で行っていました。このような取り組みの中で

若者の非行が減ったという話が、印象的でした。9.11テロ事件以降アラブ系アメリカ人への風当たりが強くなった中、このようなシリア系アメリカ人の絵画展をすることは重要であると思います。

興味深い取り組みとして、自由図書館(Free library)があります。平和センターの外に設定して、読まなくなった本を寄贈し、読みたい本を入手することができるようにしています。その際お金ではなく、別の本を置いていく良心市のようなコーナーです。本のない人は、せっけんを置いていたこともあるそうです。

私立のため財政難をどう克服するのかは、重要な問題です。「草の家」のように、他の団体に場所を貸して、場所代を収入にしています。ユニークなのは、単に会議をする場所ではなく、結婚式や誕生パーティなどにも使えるようにしていることです。また支持者の寄付はお金だけでなく、手作りのものを寄贈してもらい、ミュージアムショップで販売しています。また贈答品で不要なものなども受け付け、時々バザーをして収入にしているそうです。いろいろな市民が自分ができることをしていて、小規模でも地道に活動をしている姿が印象的です。

※※※※※

連絡先: Swords Into Plowshares Peace Center and Gallery: 33 E. Adams ·Detroit ·Michigan 48226 USA

Tel: (313) 963-7575

開館時間: 木曜日と土曜日の午後12時から17時まで。

夏休みに訪問する場合は、予約が必要。

<http://www.swordsintoplowsharesdetroit.org/>



Free Library



刀を鋤に

ガイドのスキルアップ

立命館大学国際平和ミュージアム

ボランティアガイド・平和友の会 高城 義秋

立命館大学国際平和ミュージアムをガイドするには日ごろの学習が何より大切です。そこで、ガイド部のなかに自主学習係を設けて、ガイドをする人に役立つ情報を提供しています。

- 1 地下展示室のガイドを部員相互で行い、ガイド方法や内容についての検討会をもつ。
- 2 その時代を肌身で感じるために、戦時中の体験談を話してもらう。
- 3 歴史認識を高めるために、講師を招聘して知識を深める学習会を行う。
- 4 ガイドに役立つ博物館や現地見学学習会と部員の親睦を兼ねての日帰りツアーを行う。

等を計画し実行しています。次に、過去に実施した主な内容を述べたいと思います。

1) 「学徒動員の経験談」

話しの内容は、教育勅語、勤労働員、農家への勤労奉仕、満州へ勤労報国隊としての開拓実習、航空機部品の生産、終戦の時の解放感より虚脱感、泣くより他なかった。

生々しい体験談が聞けて良かった。体験談を話される人が少なくなってきたので、早く体験談を取り上げる必要があります。このような戦争を体験した人の話は、来館者に直接聞いてもらえればもっと実感があり、時代の雰囲気分かり、良いのではないかと思います。

各々の展示物の前に行くと、体験を語ってくださった方々の苦労が思い出され、その苦労を来館者に分かってもらえるようなガイドに努めています。14歳以上の女学生には「その頃であれば、あなた達は女子挺身隊員として軍需工場で働かなければいけなかった」、小学校の高学年の生徒には、「農家に行き手伝いをしていた」などと話が広がって行きます。

2) 「なぜ日本語教育が同化政策の中心だったか」講演 植民地と占領地の日本人化における日本語教育の ねらい。

占領地や植民地に対する「日本の同化政策―皇民化政策」では、とりわけ日本語教育が重要視されました。「天皇の臣民」という思想を徹底させるためには、言語（日本語）を教え込み最終的に日本の兵隊として戦

争に参加させるために、日本語が必要でした。戦争末期に台湾・朝鮮に徴兵制がしかれ、多くの台湾人・韓国人が亡くなりましたが、軍人恩給等は日本人でないということで支給されていない。この徹底した同化政策は他国の言語・文化を顧みない当時の日本人の独断的な考え方があったことを反省しなければならないでしょう。このような内容が未解決の戦争責任の問題に繋がっていきます。

3) お役立ち情報として、小学校の国語教科書抜粋 平和について考える単元で「平和のとりでを築く (原爆ドームについて)」(6年生9月～10月に学習 予定)と社会教科書抜粋「歴史15年戦争」(6年生 11月ごろ学習予定)を配布しました。

小学生が修学旅行で春・秋に大勢見学に訪れますが、15年戦争について質問しても学校で授業を受けてない場合が多く、ほとんどの小学生からは知らないという返事が返ってきます。小学校の教科書や授業がどのような状況かを知り、ガイドに生かすべきではないかと思い、ガイドの皆さんに事情を知って貰うために教科書の抜粋を配布しました。

平和について分かり易く伝えるにはどのような方法が有効かを考えます。

4) ガイドをする際の知識を深め実践的力量を高める ために、地下展示について、学習会を行いました。

①「空襲・沖縄戦・原爆」 先の戦争の相手はアメリカと答える子供がほとんどで、中国だったことはあまり意識されておりません。学習の必要があると考えさせられました。

②「平和への努力・戦争責任」 希望を語り平和をつくるコーナーであり、「過去と誠実に向き合う」思いでガイドをすることの大切さを説明されました。

その後のグループ討議では、希望のメッセージをどう伝えたらいいのか、どうして戦争は止められなかったのか、ただの昔話にせず現在とつなげたガイドが必要だ、等々多くの意見交換ができ、各人のガイド内容が繰り返し学習を重ねることによって高められると誰もが実感できたと思います。

以上、ミュージアムのガイドにはこのような学習が不可欠であると思っております。

2014年4月
～2015年1月
入館者状況

◎開館日数

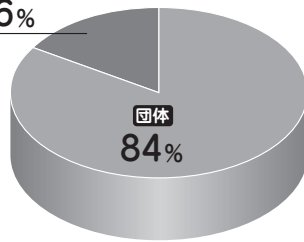
244日

◎オープン後常設展入館者数累計

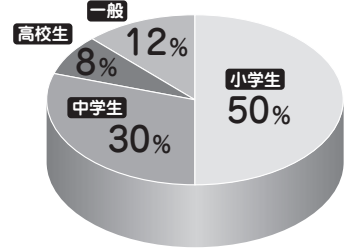
933,840名

<有料団体・個人入館者状況>

個人 16%



<有料団体入館者数状況>



2014年度	月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	人数/開館日数		
総入館者数/開館日数		2,007/25	5,715/27	3,812/25	3,653/27	2,391/26	2,759/18	10,609 /27	5,779/26	4,385/20	1,868/23	42,978/244		
来館90万人		2014年6月17日、来館者90万人（堺市立金岡南小学校6年生）												
特別展	春季特別展	「奪われた野にも春は来るか 鄭周河写真展」							会期：5/3～7/19		(67日間)	9,522		
	特別展	「世界報道写真展2014 -WORLD PRESS PHOTO 2014-」							会期：9/17～10/12		(22日間)	5,101		
	京 都	(立命館大学衣笠キャンパス 中野記念ホール)							会期：10/14～10/30		(17日間)	1,627		
	滋 賀	(立命館大学びわこ・くさつキャンパス エポックホール)							会期：11/2～11/16		(15日間)	1,972		
	大 分	(立命館アジア太平洋大学)							会期：10/21～12/14		(48日間)	12,366		
	秋季特別展	「ピース☆スタイル」												
	小 計											30,588		
特別展示	「学徒動員、学徒出陣 学生・大学と戦争」展【BKCサンクスデー】（びわこ・くさつキャンパス 石川文洋写真展「戦争と平和・ベトナムの50年」（国際平和ミュージアム ミニ企画展示室）							セントラルアーク） 会期：9/14～10/9		(6/1)		オープン		
ミニ企画 展示	第85回	ベトナム戦争の傷痕							会期：4/3～4/29			—		
	第86回	ロベルト・ユンクの生涯「ヒロシマを世界に伝える一核の被害なき未来を求めて」							会期：5/13～6/1			—		
	第87回	カンボジアの子どもたち							会期：6/7～7/6			—		
	第88回	健康はお国のために ースポーツと戦争ー							会期：7/12～8/29			—		
	第89回	第8回立命館附属校 平和教育実践展示（守山、小学校、宇治、長岡京、慶祥）							会期：10/12～12/19			—		
	第90回	アウシュヴィッツ解放70年特別展示							会期：1/10～1/31			—		
講演会 ほか	「奪われた野にも春は来るか 鄭周河写真展」													
	オープニングトーク：鄭周河（写真家）、徐京植（作家）、河津聖恵（詩人）											(国際平和ミュージアム 中野記念ホール)	(5/3)	122
	トークセッション：高橋哲哉教授（東京大学）、庵治由香准教授（立命館大学）											(国際平和ミュージアム 中野記念ホール)	(6/7)	66
	トークイベント 福島を見つめた留学生たち											(国際平和ミュージアム 2階会議室)	(7/19)	39
	来館90万人記念セレモニー（堺市立金岡南小学校6年生）												(6/17)	127
	NGOワークショップ 男も女も働きやすい社会へ ～身近にある貧困を見てみよう、考えてみよう～（国際平和ミュージアム 2階会議室）												(7/1)	25
	講師：山本知恵（京都YWCA総幹事）													
	※第1回国際平和セミナー“Lessons of 1914 for Asia today”											(国際平和ミュージアム 2階会議室)	(7/16)	47
	講師：Dr.phil.habil.Andreas Herberg-Rothe													
	夏休み親子企画「へいわ」ってなに？2014											(国際平和ミュージアム 1階ロビー)	(7/26)	97
	ー被爆し傷ついた故河本明子さんのピアノー												午前・午後各1回	
	平成26年茨本市非核平和展「さいころくん」を通して見る世界											(茨木市立中央図書館)	(7/29～8/3)	オープン
	小学校・中学校教員対象ミュージアム下見見学会											(8日間・7/29、7/30、7/31、8/1、8/26、8/27、8/28、8/29)		103
	立命館土曜講座「若い世代に語り継ぐ戦争と平和 ー学徒出陣70年から戦後70年をみすえて」													
	3102回「学徒出陣」と大学の戦争責任											(末川記念会館 講義室)	(8/2)	230
	講師：白井厚名誉教授（慶應義塾大学）													
	3103回「人責き力 物資き力」ー防空法制から診る戦前の国家と社会ー											(末川記念会館 講義室)	(8/30)	207
	講師：水島朝穂教授（早稲田大学）													
	ボランティアガイド学習交流会											(国際平和ミュージアム 2階会議室)	(8/23)	51
	「立命館大学国際平和ミュージアムのガイドとして活動すること パート2」 講師：安斎育郎名誉館長													
	※第2回国際平和セミナー											(国際平和ミュージアム 2階会議室)	(10/2)	16
	平和ワークにおける芸術アプローチ・ワークショップ「平和創造のための芸術アプローチ：紛争解決学から学ぶ」													
	講師：奥本京子教授（大阪女学院大学）													
	「世界報道写真展2014」講演													
	講師：豊田直巳（フォトジャーナリスト）													
	【京都会場】衣笠キャンパス											(以学館4号教室)	(10/7)	154
	【滋賀会場】びわこ・くさつキャンパス											(コラーニングハウスⅠ C401教室)	(10/14・15・20実施)	593
	※【共催】「遺言 原発さえなければ」映画上映会 豊田直巳監督トーク（人文研P）											(以学館2号教室)	(10/8)	120
	第8回国際平和博物館会議（35カ国、175人出席）											(韓国 ノグリン平和記念館)	(9/19～9/22)	40
	テヘラン平和博物館研修生受け入れ												(9/24～10/3)	5
	※【後援】国際地域研究所 EUプロジェクト講演会											(末川記念会館 講義室)	(10/21)	27
	“The EU Charter of Fundamental Rights and Its applicability to the Member States”													
	講師：Prof.Dr.Ferdinand Wollenschläger（アウグスブルグ大学）													
	国際交流報告会（第8回国際平和博物館会議、テヘラン平和博物館交流）											(国際平和ミュージアム 2階会議室)	(10/28)	28
	※【共催】立命館大学国際地域研究所「平和主義研究会」第3回研究会											(創思館カンファレンスルーム)	(11/1)	86
	「ベルタ・フォン・ズットナーとノーベル平和賞」													
	ピース☆スタイル公開記念上映会「イントレピッドの4人」											(充光館301教室)	(11/15)	35
	解説：大野 光明特任助教（大阪大学グローバルコラボレーションセンター）													
	NGOワークショップ エネルギーと平和 ー未来のためにわたしたちができることー											(国際平和ミュージアム 2階会議室)	(11/22)	13
	講師：伊与田 昌慶（気候ネットワーク研究員）													
	※【後援】R-GIRO「オール立命館による学際統合型平和研究拠点」											(創思館カンファレンスルーム)	(1/21・1/22)	175
	「人間の安全保障」の行方ー20年の経験と課題から													
	小 計											2,406		

※立命館大学国際平和ミュージアム附属平和研究所準備室にて行った企画（共催、後援を含む）

編 集
後 記

戦後70年となる2015年は、バリのジャリ・エブド襲撃事件、「イスラム国」による日本人殺害事件など衝撃的なニュースが続きました。たしかに暴力的なテロは許されてはなりません、たとえば「イスラム国」の問題は、歴史的にはイラク戦争後のスンニ派とシーア派の対立やシリア内戦など、多くの構造的要因に遡って考えなくてはならないでしょう。このような時期にこそ憎しみを増大させる煽動的な言動から距離を置き、冷静に平和への道を考える必要があります。日本国憲法前文と9条に示された、「紛争解決の手段としての武力の放棄」の理念は、このような時代にこそ、憎悪を巧みに利用する権力とは別のところに人間の尊厳を見出すための理念としての意味を持つに違いありません。

加國尚志

※本誌に掲載されている情報・写真等の無断転載はご遠慮ください

特別展

やまもとむねすけ

山本宗補写真展「戦後はまだ…刻まれた加害と被害の記憶」

会 期：2015年5月3日(日)～7月4日(土)

会 場：立命館大学国際平和ミュージアム 中野記念ホール

休館日：月曜日(但し、5月4日(月・祝)は開館、5月6日(水)は休館)

参観料：大人400円(350円)、中・高生300円(250円)、小学生200円(150円)

※常設展もあわせてご覧いただけます。上記()内は20名以上の団体料金です。

※「国際博物館の日」5月18日(月)は休館日のため、5月17日(日)は無料公開です。

主 催：立命館大学国際平和ミュージアム

後 援：京都府、京都市、京都府教育委員会、京都市教育委員会

京都市内博物館施設連絡協議会、KBS京都

朝日新聞社、京都新聞、毎日新聞社、読売新聞社

福島菊次郎
(2011年 撮影/山本宗補)

フォトジャーナリスト山本宗補が、日本や中国など国内外70人の戦争体験者に取材し、撮影した肖像写真と証言による写真展。出征、シベリア抑留、空襲など様々な戦争体験から加害と被害が複雑に絡み合う戦争の実像に迫ります。今年、戦後70年を迎えますが、戦争体験は未だ多くの人々に深い影響を残しています。私たちが戦後史をどのようにとらえてきたのか、改めて考えます。

《関連企画》

●5月3日(日) 13:30～15:30 講演会&ギャラリートーク

講演会：ミュージアム会議室

ギャラリートーク：中野記念ホール

講 師：山本宗補(フォトジャーナリスト)

※聴講無料(ギャラリートークは参観料必要) 詳細はHPにて

●5月30日(土) 13:30～15:30 講演会

ミュージアム会議室

講 師：林博史(関東学院大学教授 現代史)

※聴講無料 詳細はHPにて

「世界報道写真展2015」—WORLD PRESS PHOTO 15—

京都会場 9月 9日(水)～10月 4日(日) (立命館大学国際平和ミュージアム)

滋賀会場 10月 6日(火)～10月18日(日) (立命館大学びわこ・くさつキャンパス)

大分会場 10月21日(水)～11月 4日(水) (立命館アジア太平洋大学)

世界報道写真展は、オランダに本部を置く世界報道写真財団が毎年開催している世界報道写真コンテスト入賞作品で構成した写真展で、今年で58回目を迎えます。立命館大学では、1995年より毎年開催しています。この地球上で起きているあらゆる出来事を、最高の技術と取材力をもって撮影した写真は、人々に現実を強く訴える力を持っています。世界の現状を知り、いま一度、平和とは何かを考えるきっかけにしたい。だきたく開催するものです。



「スポットニュースの部 組写真2位」
ジェローム・セッシーニ(仏) 2014年ウクライナ
撃たれた仲間の救護を求める男性。独立広場での反政権運動が開始してから最悪の惨事が起き、70名の反政府デモ参加者が射殺され、治安部隊側も複数の警官が死傷した。

特別企画展示

アトリエ
無言館／京都館—いのちの画室 開設10周年企画
手島守之輔・伊藤守正—ふたりの被爆画学生の絵—展

会 期：2015年7月1日(水)～8月25日(火)

会 場：立命館大学国際平和ミュージアム 2階展示室内

2005年開設の無言館／京都館—いのちの画室は、長野県上田市にある戦没画学生慰霊美術館「無言館」が所蔵する作品、画学生たちが遺したスケッチブック、絵筆などを展示しています。今回、「いのちの画室」開設10周年を記念し、「手島守之輔・伊藤守正—ふたりの被爆画学生の絵—展」を開催することになりました。この展示は、原爆で亡くなった画学生2人の作品約20点の他、彼らの遺品も併せて展示します。戦争が激化する中、それでも芸術へのひたむきな情熱を失わなかった二人の作品を是非ご覧ください。



「海をのぞむ」手島守之輔



「奈良・高畑の道」伊藤守正

2点とも戦没画学生慰霊美術館「無言館」蔵

ミニ企画展示室

第91回ミニ企画展示

●第20回京都ミュージアムロード参加企画

立命館大学×京都外国語大学学生コラボ企画展「心の声～みて、感じて、考える～」開催中

会期：2015年2月7日(土)～3月29日(日)

主催：立命館大学国際平和ミュージアム、京都外国語大学国際文化資料館

協力：京都・大学ミュージアム連携



設営の様子

京都・大学ミュージアム連携の加盟館である両大学の学生有志12名が、「平和」につながるいくつかのテーマのもと、それぞれ性格の異なる両大学の収蔵資料を約30点かけ合わせつくりあげた、学生による平和の情報発信および協働の成果を発表するコラボ展示です。

第92回ミニ企画展示

●医の倫理—過去・現在・未来— ～日本医学会総会2015関西に向けて～

会期：2015年4月2日(木)～4月14日(火)

主催：医の倫理—過去・現在・未来—企画実行委員会

～日本医学会総会2015関西に向けて～

日本の医学者・医師がかつての戦争中に行った「人体実験」などの非人道的な行為を史実に沿って展示します。



1942(昭和17)年 第11回日本医学会総会時の第9部微生物学分科会の東京大学安田講堂前での記念撮影

第93回ミニ企画展示

●絶望の島から希望の島へ「クリオン島」—ハンセン病と差別の中を生きる人々—

会期：2015年4月19日(日)～5月24日(日)

主催：Messenger Culion 金原遥

かつて世界最大のハンセン病隔離島であったフィリピン・クリオン島。今なお続く不当な差別の中、強く生きる人々の姿や想いを伝える写真展。



ハンセン病闘病中の青年

夏休み親子企画「へいわ」ってなに??2015

コラボ企画・母と子の平和イベント 2015年7月26日(日)

共催：平和のための京都の戦争展実行委員会

「戦後70年」の親子企画は、平和のための京都の戦争展実行委員会と協力して、小中高生が参加しやすい文化イベントや夏休み応援企画など多彩な催しを予定しています。親子で平和を考える時間をご一緒に過ごしましょう。



2014年度夏休み親子企画の様子

教員下見見学会

2015年7月29日(水)、30日(木)、8月18日(火)、19日(水)、20日(木)

※参加状況により開催日を変更する場合があります。

夏休みに小学校・中学校の先生方を対象として下見見学会(無料)を開催いたします。京都への修学旅行、遠足、校外学習、地域探検等、様々な目的に合わせたミュージアムへの団体見学が可能です。見学会では、平和講義体験、学習教材キット紹介、ボランティアガイド解説つき見学、個別相談会を行います。

〈下見見学会プログラム〉

平和講義

ガイド付
展示見学教材キット
紹介個別
相談会

「平和ってなに色?」一字で表す平和へのメッセージ

会期：2015年10月27日(火)～11月3日(火)

2005年文字・活字文化振興法の施行により、10月27日は「文字・活字文化の日」と制定されました。文字・活字文化についての関心と理解を深めていただくため、立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所と連携して、文字・活字と、平和を楽しく学べる企画を行います。

● 詳細はホームページでお知らせいたします。

